

# 熊本「草枕」MAP

## 小天旅行の足跡

●1897年(明治30年)の大晦日から翌年の正月を小天温泉前田家別邸で過ごす。

## 「草枕」の道 小天旅行のコース

--- 設定誘導コース

--- 設定外推定コース

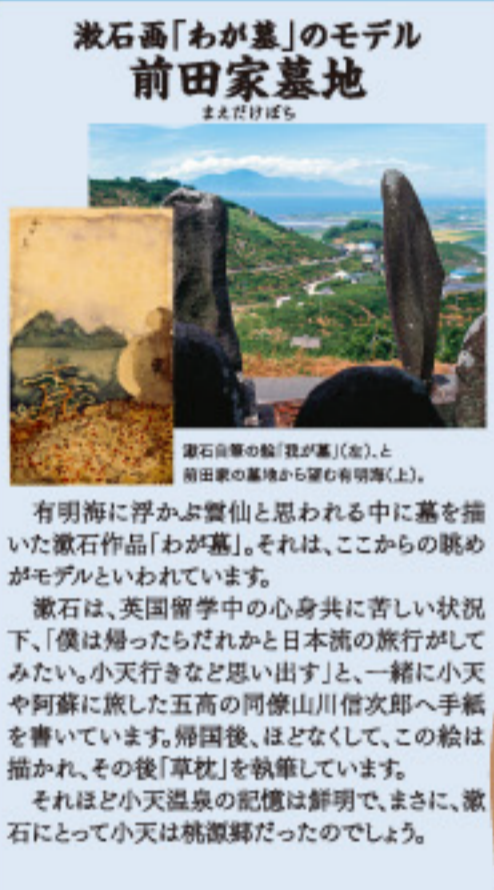
## ●距離

起点(岳林寺)より約15km

峠の茶屋公園より約12km

## 夏目漱石の家(引越し順)

- ① 光琳寺の家(下通町)
- ② 合羽町の家(坪井2丁目)
- ③ 大江村の家(新屋敷1丁目) ※現存
- ④ 井川淵の家(井川淵町1丁目)
- ⑤ 内坪井の家(内坪井町2丁目) ※現存
- ⑥ 北千反畑の家(北千反畑町3丁目) ※現存



有明海に浮かぶ雲仙と思われる中に墓を描いた漱石作品「わが墓」。それは、ここからの眺めがモデルといわれています。漱石は、英国留学中の心身共に苦しい状況下、「僕は帰ったらだれかと日本流の旅行がしてみたい。小天行きなど思い出す」と、一緒に小天や阿蘇に旅した五高の同僚山川信次郎へ手紙を書いていきます。帰国後、ほどなくして、この絵は描かれ、その後「草枕」を執筆しています。それほど小天温泉の記憶は鮮明で、まさに、漱石にとって小天は桃源郷だったのでしよう。



### 野出の茶屋跡

いでのちやま

野出公園の西端、漱石の句碑の向こうには雲仙が見えます。ここからは眼下に海が見えます。右手に有明海と雲仙。左手に宇土半島を隔てて天草の遠望。かつて、ここに隣接して茶屋が建っていました。小天からは馬に背負わせたみかんを熊本市新町にあった市場に出荷していた、朝まだ暗いうちに家を出ると時にさしかかるころ明るくなります。この茶屋には各戸が預けた家紋入りの提灯が軒先に並んでいて、「○○さんもう行とすたい」、「△△家は出ささんとだろか」といった情報が行き交わされていたそうです。間もなく市場。山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

### 石畳の道

いしだたみのちみち

【草枕の道】の大半は、明治30年当時、熊本と高瀬(現在の玉名市)を結ぶ往還でした。河内町岳の集落の西端、追分の交差点そば。そこには、住時をしのげる道標が立っています。追分を玉名へ30メートル先、県道脇の標識から山あいに分けると中ほどから石畳が始まります。ここは当時の面影を深く残しているところで、散策するファンに最も人気があるところ。薄暗く、苔むし、竹の落ち葉におおわれた石畳の中にあたずれば、いつしか世俗を忘れ、向こうから漱石先生が歩いて来るような錯覚さえ覚えます。山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

### 鳥越の峠の茶屋

とりごえのとうげのちやま

「おい」と声を掛けられたが返事がない。「草枕」には峠の茶屋は一軒しか出てこないが、当時、熊本から小天への道中には、鳥越と野出(いでの)の二つの茶屋があったそうです。鎌研坂を登り続けた金峰山の谷あいを抜けたところにあります。岩盤が露出した自然歩道で、まるで時代劇の道中を彷彿とさせます。「山路を登りながら、こう考えた」。おなじみの「草枕」の冒頭の一文。その山路がこの鎌研坂あたりと考えられています。

### 鎌研坂

かまがまざか

熊本市鳥越の奥、岳林寺(がくりんじ)を起点として設定された全長16kmほどの「草枕」の道(ハイキングコース)。終点(旧地)は、漱石が宿をとった小天温泉の前田家別邸です。最初のスポットが鎌研坂。登り続けた金峰山の谷あいを抜けたところにあります。岩盤が露出した自然歩道で、まるで時代劇の道中を彷彿とさせます。「山路を登りながら、こう考えた」。おなじみの「草枕」の冒頭の一文。その山路がこの鎌研坂あたりと考えられています。

### 第五旧居 内坪井の家

ごもつぼいのみえ

漱石が熊本で5番目に移り住んだ家で、最も長い1年8ヶ月を暮らした家です。この家では長女華子が誕生。夏目家にとって思い出の深い家です。漱石夫人は「熊本で住んだ中で一番良かった」と語っています。華子の産湯を使った井戸や漱石の教え子で後に物理学者、随筆家となった寺田寅彦(てらたけはらひこ)が住んだ馬丁小屋(ばちや)なども残っています。「二百十日」のモデルとなった阿蘇旅行には、この家から出かけています。現在、熊本市の記念館「夏目漱石内坪井旧居」として公開されていて、内部には、貴重な資料などが展示されています。

### 第三旧居 大江村の家

おおむらのいえ

熊本で3番目の住居。新屋敷1丁目(旧大田町)にあったが昭和47年、水前寺公園の隣にジェーンズ邸とともに移築保存されました。漱石は、この家に30年9月から31年3月までの7ヶ月住み、ここから「草枕」の素材となった小天温泉へ出かけています。その後、家主の横柄人落合東郭が相続したため、4番目の住居「井川淵の家」へ引っ越しました。漱石は、熊本で6回転居していますが、来熊早々は友人菅虎雄の家に居候し、6月初旬、最初の住居「光琳寺」の家に入居。ここで結婚しましたが、「墓がお寺でいい気がしない」と、すぐに「合羽町」の家へ引っ越しています。

### 熊本大学 五高記念館

ごうこうきねんかん

明治22年に建てられた旧制第五高等学校の本館。化学実験場、正門(通称赤門)とともに国の重要文化財に指定されています。夏目漱石は五高の英語教師として、ここで教鞭をとりました。それ以前には小泉八雲(クナダオハーン)が外国人教師として、また、嘉納治五郎が校長として赴任していました。五高は、池田勇人、佐藤栄作の二人の総理大臣をはじめ、多くの優れた人材を輩出しました。館内には、五高の歴史や漱石を始めとする著名な教授陣、各界で活躍した卒業生に関する貴重な資料などが展示されています。

### 上熊本駅(旧池田駅)

明治29年4月13日、このホームに第五高等学校(熊本大学)の教師として赴任した夏目漱石(おんむろしゆん)が降り立ちました。当時の駅名は池田駅で、明治24年、それまで船小屋までだった九州鉄道(後の国鉄、現JR九州)が春日駅(熊本駅)まで延伸すると同時に開業しています。ホームで友人菅虎雄の出迎えを受けた漱石は、駅から人力車に乗って菅宅へ向かいましたが、その途中、新坂から見た熊本を称して「森の都」といったといわれています。到着後、漱石はそのまま、菅虎雄の家に泊まり、最初の住居が決まるまで、1ヶ月ほど居候しています。